

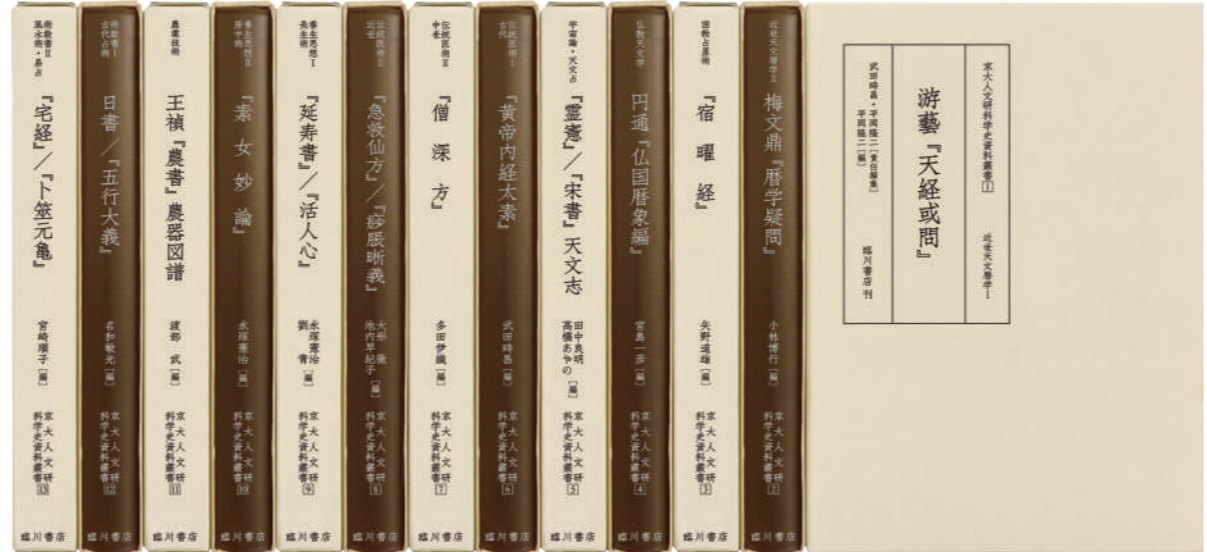


京大人文研  
科学史資料叢書  
全十三卷

責任編集：武田時昌・平岡隆一

臨川書店

2023年7月刊行開始、6ヶ月毎配本予定



**共同研究の遺産** 金 文京

本叢書の編集責任者である武田時昌氏は、私の京大人文研東大部でのかつての同僚である。人文研は戦前より共同研究をもって世に知られるが、中でも東大部の共同研究は、会談による典籍の綿密な訳注作りによる特色がある。専門を異にする複数の研究者による会談には、多大の努力と忍耐を要するが、本当に大変なのは、会談が終わった後、原稿を整理して公表までこぎつける作業である。そのためせっかくの原稿が目の目を見ずに眠っていることも少なくない。定年後、清閑の日々を送っているとはかり思っていた武田氏が、十三巻にもおおよぶ膨大な量の原稿を整理し公刊されると聞き、私は大いに驚いた。まずは武田氏の一大決心に敬意を表したい。と同時に、この難事業はもとより武田氏一人の力だけではなく、後任の平岡氏および会談に参加された多くの方々の協力があるこそなにするものであり、藪内清先生以来、伝統ある科学史研究室の結束とチームワークの良さに感心した。本叢書が斯界の今後の研究に大きく貢献するであろうことは、門外漢である私のよく断言するところである。先日、路上で偶然武田氏に会い、立ち話で推薦文を依頼され、私は即座に承諾した。もとより昔の同僚としての誼であるが、決してそれだけではない。

(京都大学名誉教授)

遙かなる共同作業

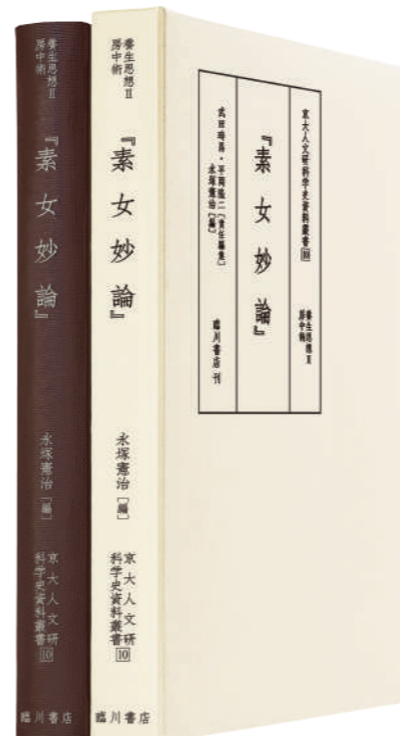
斎藤 憲

何故に原典資料集を編纂するのか。翻訳と注釈では足りないのか。その答は単純である。原典の全てを理解することは不可能であるから。時の篩を潜り抜けた伝来資料は孰れも当代最高の知性が、一言一句、最上の表現を選び抜いた労作である。しかしそれらは我々には不可解な謎に満ちている。専門の学徒として現代の子、遠い時代の、異なる文脈を背負う著作を完全に理解できるはずもない。何気ない一節に想像を超える前提や思考が隠されていまいとは断言できない。凡そ無意味と思われる異説も、それ自体が謎めいた割注も、其処に意味を見出す学徒がいつの日か現れるやも知れぬ。だからこそ膨大かつ退屈な、しかも時に困難な決断を要求する校勘・校訂という作業から逃れる訳にはいかない。忍耐は時に思わぬ発見によって報われる。とはいえ謎の大半は次代の研究に託す他はない。古典研究とは、時と場所を隔て相見えることもない学徒の共同作業でもある。西洋古典学は今なお十九世紀の校訂版に負うところが少なくない。してみれば、本資料叢書が連綿たる研究の鎖の中でひときわ大きな一駒を押し、次世紀に至るまで学徒と読者に恵沢をもたらすと予期して当然であろう。

(大阪府立大学名誉教授)  
(元・日本科学史学会会長)

◆第1回配本 第10巻

養生思想Ⅱ 『素女妙論』



- 第10巻 税込14,300円
  - 各巻予価税込16,500円
  - 菊判・上製・平均400頁
  - ISBN978-4-653-04750-6(第10巻) C33322
  - ISBN978-4-653-04740-7(セット) C33322
- \*お近くの書店または小社までご注文ください

株式会社 臨川書店

〒606-8204 京都市左京区田中下柳町8番地 ☎075-721-7111 FAX075(781)6168  
E-mail kyoto@rinsen.com URL http://www.rinsen.com

## 刊行の辞

武田時昌

京都大学人文科学研究所の科学史研究室では、研究会、読書会で数多くの中国科学史、技術史関連の文献を会読してきた。その歴史は、戦前の東方文化研究所の時代に遡る。当時の名称は、天文暦算研究室（主任・能田忠亮）であったが、会読テキストに『漢書』律曆志を取り上げ、中国天文暦法の基礎的研究として、三統暦の数理的解明に挑んだ。人文科学研究所に改組された後、主任教授は、藪内清、山田慶兒、田中淡、武田時昌と推移するが、会読形式の科学史研究会は継続され、天文暦術、医薬、農業技術から博物学、占術、日用類書に至るまで多種多様な典籍の読解に取り組んだ。

その成果の一部は、『天工開物の研究』（藪内清編、恒星社厚生閣、一九五三）、『新発見中国科学史資料の研究 訳注・論考篇』（山田慶兒編、京都大学人文科学研究所、一九八五）のように出版されたものはあるが、科学史研究室に未定稿のままに眠っているものがたくさんある。

例えば、山田班の『黄帝内経太素』、田中班の王禎『農書』農器図譜には、全巻の訳注ファイルがある。両書ともに会読を完遂した後、読み直し作業をスタートさせたが、山田教授が国際日本文化研究センターに移籍したり、田中教授が逝去したりで、中断したままになっている。その存在を知る人々から出版を望む声が幾度となく寄せられている。私（武田）の主宰した共同研究班、班員の有志との読書会での成果物も同

様であり、出版経費が大幅に削減され研究論文集を優先させたために、公刊には至っていない。

私が定年退職で研究所を去る数年前から、科学史研究室に保管された歴代教授の研究成果物や共同研究会の会読資料を整理し始めた。そして、臨川書店から藪内清著作集、山田慶兒著作集を刊行する運びになった。また、田中淡著作集は、田中悦子夫人や弟子の高井たかね人文研助教の編集で、中央公論美術出版より刊行中である。それらの出版の見通しが立ったので、いよいよ訳注集の総仕上げに取りかかった。そして、臨川書店に訳注シリーズの企画を持ちかけ、どうにか科学史資料叢書の発刊に漕ぎ着けた次第である。

近年、中国学全般の動向において、世代交代が進行する一方で、若手研究者が激減し、停滞気味である。文理兼修を必要とする科学史はなおさらであり、かつては世界に誇る水準にあったが、危機的状況にある。

中国伝統科学文化に関する概説書、入門書は、昭和の時代には藪内清博士を代表として数多く存在するが、近三〇年はマイナーなものしか刊行されていない。翻訳書については、中央公論社の「世界の名著」シリーズや朝日出版社の「科学の名著」シリーズ（いずれも藪内清編）に収められているものぐらいいしか見出せないのが現状である。本訳注シリーズが日本における中国科学史研究を活性化し、学問的伝統の継承、発展の一助となることを期したい。

（京都大学人文科学研究所名誉教授）

### 一 近世天文暦学Ⅰ 游藝『天経或問』

平岡隆二

清初の游藝の著作。イエズス会宣教師がもたらしたアリストテレス的宇宙論（九重天説、地球球体説、三際説）を、宋学的な気分の自然哲学を通じて把握・説明した概説書。江戸期の日本で広く読まれ、西洋宇宙論の伝播と普及に大きな役割を果たした。

### 二 近世天文暦学Ⅱ 梅文鼎『曆学疑問』

小林博行

清代第一の数学者、天文学者と評される梅文鼎の代表作。西洋の数学と天文学に精通した著者が、中国の伝統的な暦法と比較しながらその特徴を明らかにする。続編の『曆学疑問補』では、西洋の方法は中国に起源をもつという西学中源説を唱える。

### 三 密教占星術 『宿曜経』

矢野道雄

唐代の中国で、インド天文学を母胎として編纂された密教占星術のバイブル。日本には、留学僧として入唐した空海によってもたらされ、陰陽道に対峙する宿曜道を生み出した。大蔵経所収本より古い姿を留めた古写本が多く伝存する。

### 四 仏教天文学 円通『仏国曆象編』

宮島一彦

一九世紀の日本で円通とその弟子は、仏教の須弥山説が西洋の地球説、天動説、地動説に勝っているとする「梵曆運動」を大々的に繰り広げた。その代表著作である本書は、経典から最新の西洋天文書まで幅広く渉猟して、仏教世界像を擁護する。

### 五 宇宙論・天文占 張衡『靈憲』／『宋書』天文志

田中良明  
高橋あやの

中国では、古代より精密な天体観測を行い、日月五星の運行を定式的に把握し、ユニークな宇宙構造説を想起した。そして、観測と推算によって天文現象の異常、異変を察知し、吉凶禍福を予見する占星術を発達させ、正史に詳細な記録を残してきた。

### 六 伝統医術Ⅰ 古代 『黄帝内経太素』

武田時昌

鍼灸医術の基礎理論は、前漢末から後漢初に編纂された『黄帝内経』によって確立する。唐初の楊上善が流布本を再編纂して『黄帝内経太素』全三〇巻とし、詳しい注釈を施した。中国では散逸してしまったが、日本には仁和寺等に古鈔本が伝存する。

### 七 伝統医術Ⅱ 中世 『僧深方』

多田伊織

丹波康頼が編纂した『医心方』は、唐以前の医書を網羅的に集録し、今日に伝存しない佚書も数多く存する。仏僧の僧深が著した『僧深方』もその一つであり、六朝時代の仏教と道教の周辺でそれぞれ行われていた医療が混淆していく具体的様相が窺える。

### 八 伝統医術Ⅲ 近世 『急救仙方』／『痧脹晰義』

大形徹  
池内早紀子

近世には、実用的な医薬書が多種多様に著され、社会に広く流通することで、多元的な医療文化が開花した。『道蔵』に収められた『急救仙方』、会津藩医の児島宗説が著した刺絡専門書『痧脹晰義』を訳出し、理論的特色や社会的背景を探る。

### 九 養生思想Ⅰ 長生術 『三元参贊延寿書』／『活人心』

永塚憲治  
劉青

近世社会の健康ブームを巻き起こした養生書としては、高濂の『遵生八牋』、貝原益軒の『養生訓』が有名であるが、先駆的著作に元の李鵬飛『三元参贊延寿書』、明の朱権『活人心（法）』がある。そこに論述された養生の考え方や諸技法を概観する。

### 十 養生思想Ⅱ 房中術 『素女妙論』

永塚憲治

先秦道家思想を淵源とする長生術は、男女の房事にも延年益寿の秘訣を見出した。古代の房中書は『医心方』房内篇に収められているが、明代にも専著が登場する。戦国時代の名医、曲直瀬道三も珍重し、和語に抄訳して『黄素妙論』を著している。

### 十一 農業技術 王禎『農書』農器図譜

渡部武

元王朝は、農業技術の近世的な変革を遂げた時代である。王禎は、南北の農耕、養蚕、紡織の機具を網羅的に調査し、構造や機巧を図解し、詠物の詞譜を附した。その図説は、明末、徐光啓の『農政全書』にそっくり収録され、大きな影響を及ぼした。

### 十二 術数書Ⅰ 古代占術 日書／『五行大義』

名和敏光

中国古代占術の諸技法は、『五行大義』に体系的にまとめられるが、その淵源は先秦に遡る。近年に、日書と総称される占いの手引き書をはじめ、先秦から前漢に至る占術書が多種多様に発掘され、初源的な配当説や数理を探る手がかりが得られた。

### 十三 術数書Ⅱ 風水術・易占 『宅経』／『卜筮元龟』

宮崎順子

風水術、易占は、東アジアの庶民生活に広く根差し、今日に至るまで愛好されている。その理論的基盤は、漢代に流行した陰陽五行説や京氏易にある。敦煌出土の『宅経』、断易の指南書『卜筮元龟』等の読解を通して、唐宋以降の変容や展開を辿る。